

氏 名 : 李 妍  
専攻分野の名称 : 博士 (学術)  
学位記番号 : 博甲第 230 号  
学位授与年月日 : 平成 26 年 3 月 14 日  
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士  
学位論文名 : 『消息詞』の日本語学的研究  
論文審査委員 : (主査) 教授 高橋 久子  
(副査) 教授 高木 まさき 教授 鈴木 宏子  
教授 橋本 美保 教授 高橋 忠彦

## 学位論文要旨

### 1. 本論文の研究目的

本論文は、菅原為長撰とされる、鎌倉時代成立の『消息詞』を研究対象とし、①所収語の使用場面・意味用法、②内部の組織・分類、を分析することにより、『消息詞』の所収語彙の性格と内部構造を闡明する。従来、『消息詞』は、往来物の一種であるという説と、古辞書の一種であるという説と、二説が存在したが、上記の事項を明らかにすることは、「『消息詞』は往来物か古辞書か」という問題の解明にも繋がる。また、往来物であれ、古辞書であれ、中世の教育を支えた基本文献であり、その性格と内容を明らかにすることは、日本の教育史においても重要な意味がある。

### 2. 本論文の研究内容

#### (1) 『消息詞』の位置付け

まず、往来物全体の発展史の中で、本書『消息詞』がどのような位置を占めるかを論じた。往来物は、平安時代に十二月往返状の模範文案を掲載した形態から始まったが、中世以降種々の目的・用途に合わせて発展を遂げ、様々な種類の往来物が制作されるようになる。往来物研究の分野においては、『消息詞』は、初学者向きに使用頻度の高い語彙を「語句集」の形で編纂した往来物の一類「消息詞型」として位置付けられている。辞書は、現存最古の『篆隸万象名義』のような中国字書の模倣から始まり、院政期頃より日本独自の辞書が作成され、様々な種類の辞書・字書が編纂されるに至る。古辞書研究の分野においては、『消息詞』は、「書簡文用の正字・用語辞典」、若しくは、「初学の文字学習、消息作文の手引き等を直接の目的としながら、習字の手本にも用いられたであろうが、(中略) 消息用小辞典的な性質を具えている」、として位置付けられている。(第一章)

#### (2) 『消息詞』所収語句の分析

次に、『消息詞』に収載されている語句の分析を行ったが、従来の研究では、『消息詞』所収語個々の語句について、遺存する実際の書簡・古文書における(ア)使用状況、(イ)意味用法、(ウ)使用頻度、(エ)使用場面等を分析・検討することは、残念ながら行われていなかった。

そのため、『消息詞』所収の語彙は、格別な分類も施されていないものとされ、内部に体系性は認められない、という説が行われていた。本論文では、『消息詞』の形式的なグループ毎に、所収語句それぞれについて、古文書での使用例を採集し、文書一通全体の意味内容を明らかにし、それにより、各語句の使用状況・意味用法・使用頻度、使用場面等を闡明した。これにより、『消息詞』の語句が、現実の社会で、行政的専門用語として機能していたことも確認され、その教育効果が間接的に証明された。(第二・三章)

### (3) 『消息詞』の内部構造

『消息詞』が教育的な意図を以て編纂されているとすれば、ある種の体系に沿って語句が分類配列されているという仮定が成り立つ。そこで全体的な『消息詞』の構造について検討した結果、『消息詞』は、政治経済的な内容を持つ公的文書用語を、テーマ別に大分類した上で、使用場面に応じて下位分類するという、極めて体系的な構造を有していることが、明らかにされた。従来の研究では『消息詞』の持つ体系性が全く見落とされていたが、本論文での分析により、政治経済的な内容の公的文書用語を、使用場面に応じて分類した体系的な構造こそが、『消息詞』の本質であることが証明された。今後の研究は、この点を基礎にして、『消息詞』の成立や用途について考察するのが妥当であろう。(第四章)

### 3. 本論文の結論

本論文は、菅原為長撰『消息詞』を対象とし、①所収語の使用場面・意味用法、②内部の組織・分類、を分析することにより、『消息詞』の所収語彙の性格と内部構造を闡明することを目的とした。分析・検討の結果、『消息詞』は、政治経済的な内容を持つ公的文書用語を、テーマ別に大分類した上で、使用場面に応じて下位分類するという、極めて体系的な構造を有していることを、明らかにした。この事実は、辞書の発展史の中で、本書が重要な位置を占めることも明らかにする。室町時代に入ると、『色葉字』という一類の辞書が作成されるようになり、現存するだけでも十七の諸本を数える。この辞書は、社会経済的内容の文書用語を収録するが、全体を第一音節により「いろは」順に類聚しているために、この名がある。大雑把に言えば、『消息詞』所収語彙を「いろは」順に分類し直せば『色葉字』となるのであり、日本の辞書の流れを俯瞰的に見るならば、『消息詞』を『色葉字』の先蹤と見なすことも可能であろう。しかし、「いろは」分類に編集し直したことにより、公文書作成の際の場面毎に想定される使用語彙を参照できるという利点は失われてしまったことになる。初学者にとっては、『色葉字』より『消息詞』の方が、格段に使用し易かったであろう。この点から、本書が社会経済的語彙を学習するために編纂された、有用な教科書的辞書であったということを再確認できるのである。